
いつだってその背中ごしに

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「いつだってその背中」

【著者名】

Z9196E

【作者名】

朧月

【あらすじ】

遠足途中、皆とはぐれて迷子になってしまった幼き日の蘭。ついに泣き出した彼女の前に、蛇が現れる。幼い日のそんな出来事を思いながら、蘭は今もずっと、彼の帰りを待ち続ける。（某所に載せたお話の再録です・・・多分知らない人のが多いけど）

推理するその小さな背中は、まだとても脆くて発達段階だと思うのに……何だか凄く頼もしくて、飛びついて、ぎゅって抱きしめたくなるの。

どんな時でも、私の事を守ってくれるその背中が、いつも私の心を元気付けてくれた。そこに居るだけで安心できる……そんな感じだったよ。

思えば、それが私のまだ自覚も無かつた恋心なんだって。気づいて自覚するのは、まだまだずーっと後かも知れなけれど。

新一の一言一言が、私には凄く嬉しかったり、逆に心を引き裂かれたり。昔からずつとずーっと大きくて重いものだったの。

* * *

「ふええ……んっ」

周りを覆う、生き生きと瑞々しい緑、緑、そしてまた緑。木漏れ日が所々から彼女を照らす、その自然溢れる空間で、ついに耐え切れなくなつた少女は泣き出した。

辺りにはまさに自分の何倍あるんだろうかという位の木々が生い茂り、その中に居るのは彼女たつた一人だ。

必死でぐるぐる歩いたけれど、結果はただ、疲れて泥だらけ傷だ

らけになつただけだつた。

「……ぐすり。しんいちい、ビリー？」

しゃくりながら、必死で大声を上げる。

張り上げられるだけのボリュームで叫んでも、何処からも返事は聞こえない。まさに、隔離された世界に取り残されてしまった。

「どつち帰つたらいーの？ むかえにきてよお～」

それでも、自分の声しか聞こえない世界に不安はただ募るばかりだ。ただでさえ、いつも頼りにしている彼が居ないその状況では。

ほんの一時間ほど前までは、楽しい遠足だった筈だ。もし、なんの間違いもなければ、彼女は今頃変わらずクラスの皆と和気藹々とした時間を過ごして居た事だろ？

全ての元凶は、彼女の天性の方向音痴が引き起こした。トイレに行くといったのはいいが、帰れなくなつてしまつたのだ。

折角、迷うかも知れないから一緒に言つてやると言つた彼を、ついつい意地を張つてはねのけたのが一番痛かった。

「怖いよ、しんいちい～」

いつの自然の中といつのせ、普段の生活からかけ離れているため、テレビで見た情報などが主に頭にインプットされている。

こんな草がぼうぼうに生い茂つた所で遭遇しそうなものと言えば蛇、クマ、巨大なバッファロー、ライオン、狼、エトセトラ。まだ幼い彼女には、そんな沢山の危険な生き物達が頭に浮かんだ。

「やだーっ。わたし、たべられちゃうの？」

想像すると、ぞつとした。考えれば考えるほど、体が震えて動けなくなつていいく。

クラスの仲間の声は全く聞こえない。といつ事は、随分と離れてしまつているといつ事だ。

その時、ガサツと音をたて、前方の草が揺れた。

「ひつ」

少女は硬直し、思い切り息を呑む。前から這つよつと出てきたのは……三メートル以上もありそつた大蛇だった。

「き、きやあああああ———つ——！」

悲鳴を上げると同時に、蛇は勢いよく蘭の元へと這つた。

* * *

自分が殺された説に一票。彼女は心の中で票を投じた。

蛇というと、まだ幼い彼女が想像するのは全て毒蛇。咬まれたらジ・エンドの即効性だ。しかし、死んだと思った後も、ずっと恐怖も自分の足が地に着いている感覚も消えなかつた。

恐る恐る、目を開ける。その視線の先に、自分の死体があつたらどうしようなんて考えも、彼女の頭には浮かんでいた。

開けた目は、そこに映った景色にそのまま大きく見開けた。ずっと溜まっていた涙が、緊張感をなくして片目から一粒だけ零れ落ちる。

視界にあつたのは、自分に噛み付いている蛇じゃない。まして、自分の死体なんかでもなかつた。

「……ばーうつ。だから一緒にいてやるうつただろ?」

開けた視界には、とても頼もしい背中があつた。飛びついた蛇は彼が掲げる棒を咥えてぶら下がっている。

彼が思い切り枝をふると、蛇はテレビの某悪者役のように吹っ飛んで退散した。

「しんいちつ。しんいちいーつーー!」

後ろから、どんどん飛びついて抱き着いて。確かにそこにある温もりに心底安堵しながら、少女は何度も彼の名を呼んだ。

彼は照れくさそうに、赤くなつた頬を入差し指で二度三度かいだ。

「ホラ、帰るぞらん。先生も心配してたんだからなー? 今度からは、へんな意地はつてんじゃねーか」

「うんっ」

頬を染めながら差し出された手を、ぎゅっと握り締めた。

頼もしい彼の背中と、手から伝わる温もりは、何よりも大きな支え。不安で仕方が無かつた心が、いつの間にか柔らかく暖かくなつてゆく。

彼のもつ大きな光にあてられている、こんな優しい時間が、彼女

にはとてもなく大切なものだった。

「懐かしいなあ～、あの時の事」

新一に手を引かれて歩いたあの道は、疲れた子供の足には少しハードだつたけど……前にある背中から沢山のパワーが伝わってくるの。

だから私、頑張れたの。いつも、辛い時も乗り越えてこれたんだよね。

『あんだけよ、突然黙り込んだと思つたらしみじみしゃがつて』

「なんでもないわよ！ 新一が蛇の話なんてするから、変な事思い出しちやつたじゃない」

受話器越しに伝わるその声は、少し呆れたような、いつも通りの乱暴な言葉遣い。でも、元気そうな声に安心する。

だから私も声のトーンを一つあげて、強がつて見せるの。もう私も子供じゃないんだから。新一の頼もしい背中が無くても、元氣でやつてるんだからね！ つて。

『よくわかんねーけど、別に変わった事は何もねーんだな?』

「うん、だからあなたも早く帰つてきなさいよ？ ずっと、待つてあげるから」

『ああ、じゃあな！ また電話する…』

「最近寒くなつてきてるみたいだし、体、気をつけてね！」

切れた電話は少しだけ名残惜しくて、胸がきゅっと締め付けられる。

次に声聞けるの、何日後かな？

でも、元気であればそれでいいもの。危険な思いしても、絶対ちゃんと帰つて来てくれるようにな祈つてゐから。

待つてゐからね。

あの幸せだった日々が、もう一度訪れるつて、信じてる。
今度は私が、あなたにとつてもよく似た、あの少し生意氣でとつても可愛い男の子に、頼りになる背中を見せていくから。

「ただいま、蘭姉ちゃん」

「あ、お帰りなさい。コナン君」

今はただ、この小さな男の子は、目一杯の笑顔を送る。やうすれば、コナン君もまた凄く幸せそうな笑顔を返してくれるから。

(後書き)

どうもですー
最近いろんな場所から引っ張り出す事が多くなりました、朧月です
こんばんはー（笑）

これもまた、某所で飾つたまんまで出しました。比較的最近だしね
直しいれる必要もないかななんて。

ちび新蘭、前回j10vreで出したとき意外に人気でしたので、
ちょっとぴり寄せに思いながら出す決心したのかな＼

とこうわけで、（電話で）新蘭、（思い出で）ちび新蘭、（現在）
口蘭を一話に詰め込んでみたお話でしたが、お気に召していただけ
ましたでしょうか？（^ ^）

もし楽しくお読みいただけたなら幸せです＼

好評だと、また持つてきてくれるかも 色んな場所の限定公開もの
があつたりする私ですから (*^-^*)

それでは、突発と言つ事でつたない短編を、お読みいただきまして
ありがとうございましたー次作でも是非よろしくお願ひ致します
ね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着ようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9196e/>

いつだってその背中ごしに

2010年10月8日22時42分発行